複写・転送禁止

出版

25年3月期連結業績は増収減益

KADOKAWA

サイバー攻撃の減収影響83億円に

KADOKAWAは5月8日、2025年3月期通期連結決算を発表。売上高2779億1500万円（前期比7・7％増）、営業利益166億5100万円（同9・8％減）、経常利益177億4200万円（同12・3％減）、親会社株主に帰属する当期純利益73億9200万円（同35・1％減）の増収減益となった。

昨年6月に発覚したサイバー攻撃に関連するマイナス影響は、売上高で出版・IP創出（国内紙書籍）36億5000万円、Webサービス39億5000万円、その他7億円の計83億円。営業利益で出版・IP創出19億円、Webサービス21億円、その他7億円の計47億円。さらに、ニコニコサービスのクリエイター補償や調査・復旧作業等に係る特別損失24億1300万円を計上した。

出版・IP創出事業は売上高1513億6700万円（前年同期比6・6％増）、セグメント利益83億7200万円（同19・2％減）。書籍・雑誌はアジアおよび米国での好調が継続し海外事業が増収。国内は新規IP数が増加し児童書の『バンどろぼうとりんごかめん』やコミックの『よつばと！（16）』、『ファイブスター物語（18）』などの新刊が貢献したものの、サイバー攻撃の影響を中心とした既刊の出荷減少により減収。一方、電子書籍・電子雑誌は他社ストア向け販売を中心に好調に推移したことに加え、ライセンス収入は遊技機向けなどの貢献により増収となった。

利益面では、サイバー攻撃の影響を含めた国内紙書籍事業の減益や、中長期的な成長を見据えたIP創出機能の強化のための継続投資により減益となった。

アニメ・実写映像事業は、売上高510億9200万円（同10・9％増）、セグメント利益47億2900万円（同3・4％増）。アニメで『推しの子』2期や『Re：ゼロから始める異世界生活』3期など人気シリーズの国内・海外配信向けや、ゲーム・グッズ向けライセンス収入が好調だった前年同期をさらに上回る成長を実現。実写映像では、前年同期に劇場作品『君』、『カラオケ行こ！』、『マッチング』などの貢献が大きかったが、これら作品と過去作品の配信向けライセンス収入の貢献などで横ばいを維持。利益面では、アニメの増収影響などにより増益となった。

ゲーム事業は売上高335億9700万円（同32・5％増）、セグメント利益95億3800万円（同20・0％増）。㈱フロム・ソフトウェアが発売した『ELDEN RING』のダウンロードコンテンツ『ELDEN RING SHADOW OF THE ERDTREE』の国内外の販売が好調に推移したことにより、同作本編のリピート販売も増加し全体の業績をけん引した。

Webサービス事業は売上高180億3800万円（同15・7％減）、セグメント損失9億9800万円（前年同期は営業利益3億6200万円）。サイバー攻撃によりニコニコ関連サービス全般が停止した影響で減収。利益面ではイベントの企画・運営でコスト適正化の取り組みが奏功し収益性が改善した一方で減収影響が大きく減益となった。

教育・EdTech事業は売上高151億1900万円（同12・9％増）、セグメント利益23億8200万円（同37・9％増）。クリエイティブ分野の専門校を運営する㈱バンタンは昨年4月に開校した新スクール「KADOKAWAアニメ・声優アカデミー」や展開地域の拡大により生徒数が増加し増収。㈱ドワンゴによるN高等学校・S高等学校向け事業は、通学コース向け新キャンパス開設等により生徒数が増加し堅調に推移。増収影響により増益となった。

キャラクターグッズなどの企画・販売を行うMD事業や「ところざわサクラタウン」などの施設運営などの「その他事業」は、売上高178億8100万円（同11・9％減）、セグメント損失42億4000万円（前年同期は損失43億9900万円）。

MD事業は海外でのグッズ売上やオンラインくじの好調により増収。施設運営事業は全国主要都市で開催するIPイベントが好調に推移した一方で、大型のイベント運営受託があった前年同期から横ばい。それ以外の事業は一部商材の仕入販売撤退やグループ内のDXを担う機能子会社における内部取引の減少などが影響し減収。MD事業が増収影響により増益となったことに加え、施設運営事業では前年同期に実施した減損による償却費の減少や継続的なコストコントロールにより収益が改善し赤字幅が縮小した。

26年3月期の連結業績見通しは、売上高2919億円（同5・0％増）、営業利益167億円（同0・3％増）、経常利益187億円（同5・4％増）、親会社株主に帰属する当期純利益114億円（同54・2％増）を見込んでいる。

いったコスト削減施策や、適正な初版部数や適正在庫を予測するためのシステム投資および重版をデジタル印刷に移行する等効率的な生産体制を実現できるという。

営業体制については、取次営業から書店営業への移行、および書店に向けたデータドリブンなソリューションを提供できるようなシステム投資・社内リソース最適化を目指していくという。また、他社との協業を含めて事業の構造改革や投資等を積極的に取り組んでいく意向。

インプレスHDが同日に発表した2025年3月期決算は、売上高143億8700万円（前期比0・5％減）、営業損失2億3700万円（前期は4億8300万円の損失）だった。24年11月に公表した業績予想では5000万円の黒字を見込んでいたが、2億8700万円下振れ一転赤字になった。

在庫評価の改善が想定を下回ったこと、ネットメディア事業においてはネットワーク広告の減少で収益性が低下した。第4四半期に孫会社「原の小屋」の譲渡や、不採算のオリジナルマンガ事業からの撤退等に伴う一時的な費用8600万円を計上したことも影響した。

インプレスHD　7月上場廃止へ　25年3月期は営業赤字

インプレスホールディングス（HD）は5月13日、7月に東京証券取引所スタンダード市場からの上場廃止を予定していることを発表した。

同社の支配株主でインプレスグループ創業者塚本慶一郎氏と有限会社T&CO.がインプレスHDの株式を非公開化するための株式併合を実施する予定。6月25日から7月27日まで整理銘柄に指定された後、同28日をもって上場廃止となる見込み。

塚本氏とT&CO.はインプレスHDの株式を16776万3200株（所有割合57・0％）所有する支配株主。

開示資料によると、T&CO.は「紙媒体を取り巻く環境が非常に厳しく、デジタル化推進および印刷効率化に向けた抜本的な構造改革を推進することが必要」とし、株式併合による非上場会社で「中長期的な生産・営業機能の集約等組織的な再編を行いやすくなると考えている」という。

具体的には、インプレスHD内での原材料の共同調達やオフセットとデジタル印刷の用紙統一と伸ばすのは限界があるので、棚のシェアや、壁を貸し出してギャラリーにするなど、店の空間を使ってできることを考えたい」と川田さん。

さらに、「若者は本を買わないと思いがちだが、私の体感では〝ものすごく厳選はするが欲しいものは買う〟という人が多い。その若者たちの必須ツールであるSNSの活用なくして経営は成り立たない」とSNSの重要性に言及。イベントや旅行の写真をインスタグラムやXでこまめに発信していると言い、「アイテムではなく店自体を〝推し活〟してもらうのが理想。発信を続けて、そういう人を一人でも増やしていきたい」と語った。

売上は、書籍が7割（新刊書籍7割、古本1割、ZINE2割）、オンラインショップが1割、イベントが1・5割、雑貨が0・5割。「収支はなんとかプラマイゼロで、厳しい状態」だと明かすが、「子どもの頃からずっと持ち続けている〝旅が好き〟という気持ちが、店を続ける活力になっている」と話し、今後は「本の売上を

駅から一本道の通り沿いで、行き交う人も多い

所在地：東京都杉並区西荻北3-12-10 司ビル1F
仕入れ：出版社直取引、弘正堂図書販売、子どもの文化普及協会

コレが〝ウリ〟です ～独立系書店の創意工夫～

〝旅〟にまつわる本で集客

旅の本屋のまど（東京・杉並区）

独立系書店が生き延びるための〝ウリ〟やノウハウを紹介する連載第14回。東京・杉並区で「旅」をキーワードにした店「旅の本屋のまど」を経営する川田正和さんに話を聞いた。【市川真千子】

古本・ZINEも新刊と区別なく陳列

旅の本屋のまどは、「旅」にまつわる書籍や雑貨をそろえる専門店だ。西荻窪駅から徒歩5分の通り沿いで、2007年に開業。書籍在庫数は約4000冊、売り場は15坪で、川田さんが一人で運営している。

「旅の本」と聞くと旅行記を想像するが、各国の文学、音楽、映画、思想、料理、スポーツ、政治、宗教などさまざまなジャンルの本が並ぶ。「旅好きの人だけが集まる閉じた空間にはしたくない。旅に興味を持つきっかけは人それぞれだから、どんな人が来ても興味を持てるような本を選んでいる」と話す。「いろいろな人がここに来て、何かしら旅につながるような出会いをしてほしいと思う」。

新刊書籍7割、古本とZINEを各1・5割ほど取り扱うが、種類の区別はせず、アメリカ、ヨーロッパ、中南米といった地域別にすべてを陳列している。「種類にこだわらないほうが、絶版になった本も置けるし、幅広い品ぞろえができる」。また、著者から持ち込まれることが多いというZINEについては、「内容もいようなものがよく売れる」と川田さん。さらに月2回ほど、リアルとオンラインで著者によるトークイベントを開催。旅関連の新刊本が出た際に、川田さんから著者にメールでコンタクトを取るほか、著者や出版社から連絡が来ることもよくある。「セッティングなど大変な面もあるが、新規客を呼び込めるし、本の売上も期待できる。イベントがマイナス要素になることはないので、続けていきたい」。ただ、発売日を過ぎると客がほかで本を購入し、売上につながらないため、イベント日程の設定には注意を払っていると言う。

中央に新入荷の書籍や雑誌、壁際の棚は地域別に本が並ぶ

川田正和さん
大学卒業後、出版社に入社。退社後はリブロに7年間務める。2003年から吉祥寺の「旅の本屋のまど」店長に。閉店を機に、店名を受け継ぎ07年に西荻窪で現店舗を開業。

SNSの活用に注力したい

オンラインショップも運営し、店舗にあるタイトルの3割ほどを販売している。「レアなZINEなど、うちの店でしか手に入らないようなものがよく売れる」と川田さん。さらに月2回ほど、リアルとオンラインで著者によるトークイベントを開催。旅関連の新刊本が出た際に、川田さんから著者にメールでコンタクトを取るほか、著者や出版社から連絡が来ることもよくある。「セッティングなど大変な面もあるが、新規客を呼び込めるし、本の売上も期待できる。イベントがマイナス要素になることはないので、続けていきたい」。ただ、発売日を過ぎると客がほかで本を購入し、売上につながらないため、イベント日程の設定には注意を払っていると言う。

デザインも装丁もクオリティがとても高い。お客さんにとって、出版社の本かZINEかどうかは関係ない。ZINEのステータスが上がってきていると感じる」と話す。雑貨も作者からの持ち込みが多く、外国の風景や料理を描いたポストカードや缶バッジ、Tシャツなど、旅を想起させるアイテムがそろう。仕入れは出版社直取引がメイン。旅の本を出している版元はそんなに多くないため、直接入れている。直取引できない出版社の本は弘正堂図書販売と子どもの文化普及協会を利用している。

川田さんは50カ国ほど旅の経験があり、初めての海外旅行でニューヨークのイースト・ビレッジの旅行専門書店を訪れ、魅了された。「パスポートを所有している日本人が2割弱」という現状を憂いており、「国内もいいが、日本の外に旅することでしか得られない出会いや発見が確かにある。海外に行く面白さを知ってほしいという思いで店をやっている」と語る。

出版時評　NIPPAN Conference記念講演

日本出版販売が年に1回、取引書店や出版社を集める「NIPPAN Conference」は、毎回、記念講演が魅力の一つだ。前回のハロルド・ジョージ・メイ氏の組織改革の話は具体的かつインパクトがあったが、今回のジャパネットホールディングス・高田旭人社長の話も参加者を惹きつけた。

通販会社大手として知られるジャパネットたかたを一代で築いた創業者の父親から事業を承継し、10年ほどで会社組織を整備、父の時代に1500億円ほどだった年商を2700億円にまで拡大した。

その中で、18時半以降在社禁止、年間16連休といった福利厚生の充実、抜擢も降格もある人事制度、それを支えるためのコミュニケーション手段など、改革の数々には驚かされる。

さらに、地元長崎県の地域振興のため、サッカースタジアムやアリーナ、ホテル、商業施設などからなる複合施設「リージョナルクリエーション長崎」を開業。ここでも斬新な集客手段を次々に打ち出しているという。

参加した書店、出版社経営者の中にオーナー企業を承継した人々も多く、「質疑でも「先代時代の幹部をどう活用したか」といった質問が出た。また、同じように地元企業とスタジアム建設を検討しているという書店経営者がスタジアム運営について質問。地域貢献という視点からも共通のテーマがあった。【星野渉】

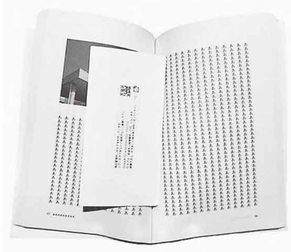
光文社　RFIDタグ挿入開始　7月から新刊コミックスにフィルムパック化も実施へ

光文社は7月以降に発売する新刊コミックス（雑誌扱い、書籍扱いとも）について、PubteXが供給するRFIDタグの挿入を開始すると発表した。

また、これに伴って対象出版物のフィルムパック出荷も始める。

タグは「しおり型を採用し、印刷所で対象出版物に挟み込んで、フィルムパックで出荷する予定。

タグ挿入に伴い、書店に対しては、①通常通りの取り扱い（販売・出入庫・返品等）、②販売にあたりRFIDタグを抜く必要はない、③対象刊行物を販売した後、購入者のRFIDタグの破棄については一般的に「家庭一般廃棄物」の扱いとなる、④RFIDタグが挿入された刊行物により、書店に既設の盗難防止ゲート（EASゲート）が鳴動することはないと注意点を示している。



光文社がコミックスに挿入する「しおり型」タグ

第68回「群像新人文学賞」　京都の書店員　駒田氏が受賞

講談社は5月7日、第68回「群像新人文学賞」の受賞者二人を発表した。当選作は「鳥の夢の場合」の駒田隼也氏。駒田氏は京都市の書店に勤める書店員。1995年京都生まれ。京都造形芸術大学（現・京都芸術大学）文芸表現学科卒業。

もう一人の受賞者は「アザミ」の綾木朱美氏。綾木氏は95年神奈川生まれ。29歳。東京大学大学院総合文化研究科修士課程修了で現在は会社員。

当選作は同日発売の『群像』6月号に全文を掲載している。単行本は今夏刊行予定。

本紙よりもお得に「The Bunka News」デジタル版

さらに充実

速報、本紙に載せきれないコンテンツも満載

デジタル版では、業界の最新ニュースをほぼ毎日更新。各社人事情報、各氏あいさつ全文など、限りある紙面では載せきれないコンテンツも掲載しています。紙面に載ったインタビューやコラムなどもすべて読むことができます。

利用料は本紙と同じ月額3771円（税込）

デジタル版の月額利用料は1アカウント3771円で、本紙1部の月ぎめ購読料と同じです。コロナ禍で各社の働き方も変化する中、会社にある紙の新聞が読めない「リモートワーク」「在宅勤務」の方々にもおすすめです。

https://www.bunkanews.jp

株式会社 文化通信社
〒101-0054 東京都千代田区神田錦町3-7-2 東京堂錦町ビル3階
Tel:03-5217-7730　Mail:eigyou@bunkanews.co.jp